

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

| | | | |
|----------|-----------------------------|---------------|-------|
| 機 関 名 | 京都大学 | 整理番号 | U04 |
| プログラム名称 | 霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院 | | |
| プログラム責任者 | 北野 正雄 | プログラムコーディネーター | 松沢 哲郎 |

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、学生を国内外のフィールドワークに向かわせるため、霊長類学・ワイルドライフサイエンスの基礎をなす学問教育や国内外での実践的なフィールド実習を行い、「ワイルドライフサイエンス」という新学問分野を構築した点は高く評価できる。語学に関しては英語を必修としており、調査地の現地言語の習得は現地講義を重視し、自学自習を支援している。また、フィールドワークとラボワークの双方の実習を必修とし、フィールド実習で収集した資料をもとにゲノム解析を学び、その成果が学位論文にも生かされている。学生の教育エビデンスは Student Educational Profile システムで一元管理し、その情報を公開して評価を受けるという PDCA サイクルを構築している点も、継続的な教育体制として評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、多彩な分野の教員からの教育、世界中を巡るフィールドワーク、頻繁に開催される講演会等により、多様な分野における人的ネットワークを構築したことは評価できる。また、国内外の分野を超えて協働する The International Symposium on Primatology and Wildlife Science は年2回開催され、多くの修了者が継続的に参加しているため、修了者のキャリアパスや動向を把握できている。令和元(2019)年度の修了予定者を含めた修了者は、米国の大学教員、日本学術振興会の特別研究員(PD)、国際機関、NGOなどに職を得る、または得る予定であり、本プログラムの趣旨に沿って、教育とアウトリーチに携わりつつ研究を発展させていくことが期待される。

事業の定着・発展については、平成30(2018)年4月に全学組織の「大学院横断教育プログラム推進センター」を設置し、学長をトップとする全学的なマネジメント体制が整い、参画専攻に所属していない学生であっても、文理を問わず優秀であれば特別履修生として大学独自の予算によりプログラム履修が可能なシステムを構築するという、計画を超えた取組が行われ高く評価できる。また、支援期間終了後の予算が確保されているほか、令和元(2019)年度の博士後期課程履修者の7割が日本学術振興会の特別研究員(DC)や国費留学生に採用されており、学生の経済的自立が進んでいる。さらに、ポルトガルの野生馬管理のため開発した個体識別アプリの動物園館への応用、野生動物の腸内細菌から利用可能な酵素の商業的応用、ヤクシカ被害や国内各地の猿害に対処する民間への寄与、野外活動関連の雑誌との連携等により、民間から資金を得る産学連携を構築している点は計画を超えた取組であり、事業の定着・発展が図られていることも高く評価できる。